

『新狛江市史 普及版』構成（案）

※刊行物としての名称をどうするか

『新狛江市史 普及版』、『新狛江市史 ダイジェスト版』、『ダイジェスト版 新狛江市史』
『狛江市の歴史』、『狛江の歴史』、『こまへの歴史』
『〇〇歴史物語』、『図説 〇〇の歴史』、『目で見る〇〇の歴史』、『〇〇のあゆみ』など

I-1. 狛江の地形の成り立ち

- 狛江の歴史を考える上で、基礎となる地形の成り立ちについて、武蔵野台地形成以前、海底であった場所に、旧多摩川が運んできた礫層が基盤となって台地を形成するまで段階と、多摩川の影響により河岸段丘が形成されていく段階に分けて説明。段丘面の形成、名残川の形成についても合わせて説明する。
- 台地と低地の広がり、崖線と湧水のことを説明し、そのうえで土地利用の在り方にも言及する。
 - 基盤地質図とダイカイギュウ化石の写真
 - 台地を作る礫層とローム層の関係、地形断面図
 - 崖線と湧水の模式図、台地と低地の広がり土地利用状況(米軍空中写真)

I-2. 湧水を望む村の出現

- 旧石器時代の遺跡が集中する野川流域において、離水時期との関係から狛江に旧石器時代の遺跡が少ない理由を説明。弁財天池の旧石器や縄文早期の陥穴など、市内における最古の生活痕跡は、弁財天池の湧水から旧清水川沿いに残されていることを説明する。
- 縄文時代中期になると、湧水まわりが繰り返し利用されるなど、一定の地域への定着度が高まり、遺物や遺構に地域性が濃くなること、それら地域性相互の交流が活発になること、その後、気候変動などで再び移動性が高まり、土地利用の中心が低地に移行することなどを説明する。
 - 弁財天池遺跡の石器、ローム層断面模式図
 - 弁財天池・旧清水川沿いの陥穴、石器製作跡等
 - 野川沿いの集落遺跡の分布、弁財天池遺跡の住居分布土器にみる地域性
 - 柄鏡型敷石住居の分布(居住地の単期分散化)

I-3. 稲作がはじまった頃の狛江

- 縄文文化から東日本系弥生文化への移行、過渡期にあたる埴上遺跡出土の条痕文土器を説明する。
- 東日本系弥生文化の発展形として多摩地域の弥生文化の動向を説明。多摩川中流域にも本格的な東日本系弥生文化が発展した結果として、弁財天池遺跡の方形周溝墓が残されたこと。副葬品からみた地域性を合わせて説明する
 - 初期弥生文化の模式図と埴上遺跡出土の条痕文土器
 - 弥生時代後期の遺跡分布と弁財天池遺跡方形周溝墓と副葬品の様子

I-4. 狛江古墳群の成立と展開

- 多摩川流域の古墳築造文化の変遷と、5世紀に入り大和王権から河内王権への移行を反映して野毛古墳群が形成されるが、その影響下に狛江にも古墳群が形成されたことを説明。
- 狛江古墳群の特徴として、中規模墳を中核とする小規模墳が短期間に集中的に、しかも集落の近くに築造された背景を説明し、和泉式土器を通じて当時の村の様子を説明する。

- 多摩川流域における古墳の分布、広がりの変遷図

- 造墓活動の背景(宿屋敷西1号墳)と地域間交流(土屋塚の埴輪)

- 狛江における主要な古墳の分布と集落の広がり

- 帆立貝形古墳、造出付円墳、ブリッジ付き円墳

- 亀塚古墳 調査当時の写真、遺物、和泉式土器

I-5. 狛江郷と古代の集落

- 狛江では、5世紀に数多くの古墳が残され、集落も残されるものの、6世紀には集落形成が低調になる。その後、猪方小川塚古墳が形成された7世紀半ばになると再び集落数・住居数は増加していくが、その背景として武蔵国、武蔵国府の成立に向けた地域開発があることを説明。考古学的にみた『倭名類聚抄』にみる狛江郷との関係性に触れる。
- 猪方小川塚古墳の横穴式石室からみた多摩川流域の地域動向と背景について説明する。

- ◎多摩川流域における横穴式石室墳の時期別・形式別の分布図

- ◎猪方小川塚古墳の石室実測図、出土遺物

- 竈を持つ竪穴住居の写真と模式図、遺物の出土状態

- ◎弁財天池遺跡出土の新治廃寺同ハン瓦

- ◎古屋敷・相之原遺跡の布基礎建物

II-1. 武蔵国の武士団と御家人狛江氏

- 12世紀前半頃から、武士たちの活動が史料上に確認できるようになる。武蔵国における中小武士団は武蔵七党と呼ばれ、多摩川周辺には西党と称される武士団が勢力を伸ばした。また、西党のなかには狛江を名乗る武士がいたことを紹介する
- 源頼朝の上洛に際して、随行した御家人の中に駒江平四郎という狛江を名乗る人物がいたこと、また、長尾(川崎市多摩区)の威光寺領に乱入して荻田狼藉を働いた狛江入道増西という人物がいたことを紹介する
- 調布には、狛江入道の屋敷跡との伝承がある場所が存在する。「新編武蔵風土記稿」にはその絵が載っているため、余裕があればその図像を掲載するか

- ◎西党日奉氏略系図(『通史編』161頁)

- 西党分布図(多摩川流域の武蔵七党の分布)

- ◎「吾妻鏡」建久元年(1190)11月7日条 源頼朝の上洛

- ◎「吾妻鏡」承元2年(1208)7月15日条 狛江入道増西の乱行

II-2. 南北朝・室町時代の狛江地域とその周辺

- 鎌倉末から室町時代にかけて、武蔵国南部でも多くの戦乱があった。その中で、市域周辺の主要な戦乱を図示する
- この時期は、吉良氏が世田谷や蒔田（横浜市南区）に拠点を構えた時期であり、また、「太平記」には江戸氏が稲毛荘を領有したと伝わる。そういった周辺の状況を中心に記述するか
- 中世には供養のために板碑という石造の碑が多くつくられた。市域では、南側を中心に129基確認されている。これらの板碑の造立のピークは14世紀末から15世紀初頭にかけてと、15世紀後半の2つ見られる。こういった造立年代の傾向や、所在地・出土地の傾向を紹介する

○鎌倉末から室町時代の市域周辺の主要な戦乱と諸勢力の分布

◎板碑の所在地・出土地と年代(『通史編』219頁)

○板碑の地域ごとの分布図と墓地として使用されていたとみられる中世遺跡

II-3. 戦国時代の狛江地域—上杉氏と小田原北条氏との対立のほざまで—

- 小田原北条氏の勢力伸長と、山内・扇谷上杉氏の後退について触れる
- 永正元年（1504）9月の立河原の戦いにおいて、伊勢宗瑞・今川氏親は進軍の過程で、枳形山に陣取り、そこから多摩川沿いに立川へ進軍した。また、享禄3年（1530）はじめに扇谷上杉氏は北条氏を破るも、同年6月に北条氏が小沢原で扇谷上杉氏を破る。天文6年（1537）には扇谷上杉氏が北条氏に対抗するために「神代寺古要害」を取り立てたことなどを記述し、北条氏の勢力伸長過程で、狛江を含む多摩川流域とその周辺が境目となっていたことを紹介する

○多摩川中流域の関係図

（要作製、参考：黒田基樹『戦国北条氏と合戦』戎光祥出版、2018年）

○深大寺城の実測図や画像

II-4. 小田原北条氏の支配と狛江地域の中世遺跡

- 小田原北条氏の軍役賦課の基準となった「小田原衆所領役帳」には、「駒井本郷」や「駒井・宿河原」といった地名が登場する。それらの土地を領有していたのは、太田康資であった。また、「役帳」には登戸が「多波川北」にあると記されているなど、多摩川の流れが現在とは異なっていたことを紹介する
- 「役帳」は、北条氏が作成した台帳であったが、そこには記載されない武士もいた。吉良氏の家臣とみられる木田見郷岩戸村に住した江戸周防守重久もその一人であった（『戦国遺文 後北条氏編』補遺4868）。そういった在地の武士についても紹介する
- また、室町時代～戦国時代（15～16世紀）にかけて、市域の遺跡から屋敷跡や墓が発掘されている。例えば、寺前東遺跡（第3次調査）では、遺構から人々の生活の痕跡が発見されている。また、16世紀になると、大規模な溝に区画された屋敷が営まれるようになる。狛江地域に土着したのがどのような人物であるかは不明であるが、狛江にも武士層の存在をうかがわせる遺構や出土品が出ていることを紹介す

る

- ◎「小田原衆所領役帳」(国立公文書館所蔵)・・・江戸衆太田康資
- 「小田原衆所領役帳」にみえる狛江市域周辺想定図(『通史編』185頁)
 - ※カラー用の図版として再作製、あわせて、市内の中世の遺跡の分布を盛り込む
- 屋敷の堀跡の遺構や出土遺物の画像など

II-5. 中世から近世へ

- 中世末から近世初頭にかけて、市域の各村の名前が見え始める時期を、文禄検地帳など近世初頭の史料をもとに記載する
- 市内には、小田原北条氏の祈願所であったとされる玉泉寺や、「文禄検地帳」に「毘沙門堂」(圓住院の前身)という記述が見られるなど、中世からいくつかの寺院(あるいは宗教施設)があったことが確認できる。また、明静院の薬師如来坐像など中世の作例とされる仏像も現存する。それらの資料から、中世末から近世初頭の市域の様子を紹介する
 - 中世末～近世初頭の市域の村・寺院の分布図
 - 駒井村・学堂(覚東)村の文禄検地帳
 - 市域の中世寺院と中世の作例とされる仏像(明静院の薬師如来坐像・胎内文書など)

III-1. 江戸時代にあった七つの村々

- 現在の地図に七か村の分布を落とし込んだ模式図を作成して、市域に七つの村があったこと紹介する
- 現在の町名のうち江戸時代の村に由来するものが多くある一方、宿河原村の飛地や上野村のような村があったこと、また小足立村と覚東村のように村域が分かれていた村があり、現在の町名とは異なる地域があったことを説明する
- 「覚東村絵図」から、村域が2つにわかれていた特徴などを説明する。また、道や用水、名主宅、高札場、社寺など、絵図に描かれた内容から村の具体的な姿を紹介する
- 覚東村の江戸時代の様子を伝える史料として、民家園に移築する前の高木家長屋門の写真を掲載する。高木家は安政年間に鷹場組合村の触次役に任ぜられていることから、村を越えた広域支配について言及する
 - 七か村の模式図
 - ◎「目黒筋御場絵図」(『絵図・地図』26、国立公文書館所蔵)
 - ◎「覚東村絵図」(『絵図・地図』3か6、高木光家旧蔵)
 - ◎移築前の高木家長屋門写真(『通史編』422頁)

III-2. 村絵図からみる領主の支配

- 「和泉村三給絵図」から、同じ村でも支配が異なり、村役人や高札場などがそれぞれに置かれていた事実を説明する。また猪方村の飛地があったことも指摘し、村や支配が錯綜していたことを明らかにする
- 村と領主との深いかかわりが見られる事項として、旗本石谷氏の陣屋(下屋敷)について取り上げる。

発掘調査・絵図・文献を組み合わせ、石谷氏の江戸引き上げ後に隠居所（下屋敷）として活用されていたことなど、その後の土地利用の変遷について説明する。また、菩提寺泉龍寺や伊豆美神社とのかわりなど、和泉村に陣屋が設けられた理由の一端を明らかにする

◎「和泉村三給絵図」(『絵図・地図』15、石井義兼家所蔵)

○移築前か昭和記念公園へ移築後の石井功家住宅写真

○三給にかかわる古文書類(石井功家文書?)

◎「和泉村三給絵図」の石谷氏陣屋(下屋敷)部分拡大図

◎慶長11年(1606)5月「泉龍寺領内目録」(泉龍寺所蔵)

※あるいは泉龍寺石谷家墓所写真(『通史編』口絵)

○石谷氏屋敷跡の遺構写真

Ⅲ-3. 江戸時代の河川と用水

● 野川とその支流や、六郷用水とその支流（猪方用水など）、弁財天池や揚辻稲荷裏手の湧水、上野村付近の根川など、村絵図等を参考に市域全体の水路の模式図を作成し、灌漑用水として使用するための豊富な水が市域を縦横に流れていたことを紹介する

● 村絵図や江戸名所図会など、水路や湧水の様子がわかる絵画資料を掲載する

● 大正期の猪方用水や、昭和初期の六郷用水の取り入れ口など、近代になっても残されていた水路の痕跡がわかる写真を掲載する

○市域全体の水路図

◎「猪方村・和泉村絵図」(『絵図・地図』21、大場代官屋敷保存会所蔵):六郷用水分水の猪方用水の様子

○大正14年(1923)頃江戸屋の店先を撮影した写真。猪方用水と江東橋が写っている(谷田部秀一家(江戸屋)所蔵)。

◎「和泉村霊泉」(弁財天池、『江戸名所図会』)

◎昭和初期の六郷用水取り入れ口写真(『通史編』331頁、石井三雄家旧蔵)

Ⅲ-4. 村のくらしと諸産業の展開

● 江戸近郊に位置した市域の村々では、農業だけではなく、さまざまな農間余業が行われていたことを説明し、酒造・水車稼ぎ・鮎漁・下掃除について古文書や絵画史料などを活用して紹介する

● 村方で行われていた諸産業については、幕府の厳しい取り締まり（隠し酒造）や、権利をめぐる争い（下掃除）などがあったことを説明する

● 近世の狛江市域は、近郊農村として江戸と密接な関係にあったことを、絵図にある「江戸道」の記載や、大山道や品川道などに残されている道標などから明らかにする

○農間渡世一覧表(天保7年(1836)和泉村、『史料集 第一』247頁をもとに作成)

◎水車小屋写真(『通史編』365頁、石井正子氏提供)

◎「玉川鮎漁」(『江戸名所図会 十』、『通史編』370頁)

- 隠し酒造にかかわる古文書写真(石井功家文書)
- あるいは下掃除をめぐる争論にかかわる古文書写真(石井功家文書)
- 「覚東村絵図」(『絵図・地図』6、高木光家旧蔵)や猪方村絵図(『絵図・地図』11、大場代官屋敷保存会所蔵)の「江戸道」の記載箇所
- 「江戸道」などの記載のある道標一覧か写真

Ⅲ-5. 新田開発と多摩川の水害

- 江戸時代前期から明治初年にかけての各村の石高の変化を表で示す。また、延宝7年と明治2年の「駒井村絵図」を比較し、駒井村の開発の様子について説明する
- 安政2年の「和泉村玉川堤切所出来石砂利押入につき絵図」を取り上げ、多摩川の洪水によって田畑一円に石砂利が入る被害があったことを紹介する。この場所は、天保期に11年の歳月をかけて開発された新田にあたる場所で、短い期間に水害と復興を繰り返していたことを説明する
- 水害を受けた村は、領主に対してお救い金を求めるほど困窮していたことを説明する
 - ◎七か村の石高変遷グラフ(『通史編』278頁をもとに作成)
 - ◎延宝7年(1697)「駒井村絵図」(『絵図・地図』13、高橋弘家所蔵)
 - ◎明治2年(1869)「駒井村絵図」(『絵図・地図』56、高橋弘家所蔵)
 - ◎安政2年(1855)6月「和泉村玉川堤切所出来石砂利押入につき絵図」(『絵図・地図』48、石井功家所蔵)
 - ◎安政6年(1859)10月「大水のため田畑水腐につき御下げ金願」(『近世2』18、石井功家文書 2-314)

Ⅲ-6. 江戸時代の文化活動と庶民の旅

- 文化・文政期の狛江では、玉川碑の建立や多摩川河原での歌舞伎興行、小町雄八の活動など、文化活動が活発に行われていたことを説明する
- 歌舞伎興行について、芝居に出演した女形・立役・はやし方・座元などの人名を列挙した新出の史料が栗原繁家文書にあるため紹介する。また、『自脩篇』を掲載し、小町雄八の活動を紹介する
- 江戸時代の庶民は、伊勢参詣や諸国参詣などを理由に、一生に一度ともいえるような旅をすることがあった。参詣日記から道中の略図を作成し、さらに関所手形や巡礼供養塔から伊勢や四国などへの旅の様子を紹介する。また、明治36年に伊勢へ参詣した道中日記(『近現代2』172)を活用して、徒歩で旅をした江戸と鉄道を利用した明治の参詣道中を比較する
 - 歌舞伎興行人名書付(栗原繁家旧蔵文書 3-27)
 - ※五代目松本幸四郎や岩井半四郎の絵画資料を掲載するか
 - ◎『自脩篇』写真(『通史編』438頁、石井義兼家所蔵)
 - 参詣道中略図(『通史編』448頁を改変する、須田幸作家文書)
 - ◎文政8年3月往来手形(『通史編』447頁、大久保蕃家旧蔵文書)
 - 巡礼供養塔写真(大久保蕃家)

IV-1. 狛江村の誕生

- 明治 22 年に六か村と下布田駅の飛び地が合併して狛江村が誕生する
- 明治 26 年に三多摩が神奈川県から東京府へ移管され、東京府北多摩郡狛江村となる
- 明治 45 年に東京府と神奈川県の境界を整理
- 大正 12 年に三多摩が神奈川県へ再移管されるという話が持ち上がる
 - 明治 22 年以前のはがきと明治 22 年以降のはがき
(それまでの各村が狛江村○○になったことが宛名の変化から見られる)
 - ◎明治 26 年の東京府への移管反対文書(『通史編』576 頁、富永織之家文書)
 - 明治 45 年の東京府・神奈川県の境界変更がわかる地図・図面
 - 大正 12 年の三多摩再移管が持ち上がる(『近現代3』18、石井三雄家旧蔵文書)

IV-2. 近代の教育と学校の設定

- 狛江で初めての学校・観聚学舎の設立
- 相次ぐ学校の移転と名称の変更 (観聚学舎～国民学校)
- 狛江実業補習学校や狛江農業公民学校などの青年教育
 - 観聚学舎の修了証書(栗原繁家旧蔵文書)
 - 学校の変遷図(和泉学校・江東学校・英才学校、尋常高等小学校・国民学校)
 - その他の教育施設(実業補習学校や農業公民学校、青年訓練所)
 - 狛江実業補習学校を狛江農業公民学校へ改変につき認可関係書類(『近現代3』194)、
狛江実業補習学校学則(『通史編』664 頁、東京都公文書館所蔵)
 - 学校の教科書

IV-3. 近代の戦争と狛江

- 近代の戦争
- 義和団事件で活躍した石井参三
- 村で暮らす軍人たち
 - 日清戦争凱旋式余興として奉納芝居興行願(『近現代2』354、石井義兼家文書)
 - ◎征清戦死招魂碑(『通史編』588 頁)
 - ◎明治 33 年義和団事件従軍記章(『通史編』591 頁、石井三雄家旧蔵文書 42-2)
 - ◎谷田部国次郎戦死および戦況につき書簡(『近現代2』373、谷田部公弘家旧蔵文書)
 - 帝国在郷軍人会狛江村分会発会式の祝辞(『通史編』595 頁、石井三雄家旧蔵文書)or 分会歴史(『近現代3』228、富永春芳家文書)or 事務日誌(『近現代3』229、富永春芳家文書)

IV-4. 狛江村の産業

- 江戸時代から続く旧来の農業から、東京市の発展に伴う園芸農業への置き換わりを紹介する
- 明治の初頭には、小足立村の富永銀之助が、旧態依然とした農業を維持するだけで、進歩的なことには取り組んでいないとする一方で、和泉村の石井正義は新たな作物や品種改良に取り組むなど対比的な事例も紹介できるか。
- 明治になり養蚕が盛んになる様子、また大正～昭和には村内における養蚕が縮小していく様子
- 大正から昭和期には、狛江でも果樹栽培が行なわれるようになり、戦後には駒井で梨のもぎとりといった観光農園が行なわれていたことを紹介する
 - 作付面積・収穫高の変遷と農業生産物の変化
 - 養蚕の推移(戸数・価格の変遷)
 - 蚕種買い付けに関するはがき(『近現代3』311、富永織之家文書) or 蚕種販売鑑札、繭蚕糸売買証票(『近現代3』303・316、石井三雄家旧蔵文書)
 - 糸価大暴落により秋繭売買途絶のため救済方法協議につき通知(『近現代3』石井三雄家旧蔵文書)
 - 梨・桃の害虫駆除法および消毒薬の製法・施用法講習会案内、梨栽培法講習会案内(『近現代3』91・93、富永春芳家文書、栗山正美家旧蔵文書)
 - ◎ 梨もぎとり広告(昭和40年代頃、『駒井の民俗』口絵)

IV-5. 幻の鉄道敷設計画と多摩川の砂利

- 武相中央鉄道や城西軽便鉄道、京西軽便鉄道など、明治中期から大正期にかけて、敷設計画が持ち上がるも、実現に至らなかった鉄道について
- 鉄道敷設計画の理由の一つである多摩川での砂利採掘について
 - ◎ 玉川電気鉄道路線図(『絵図・地図』120、石井三雄家旧蔵文書)、京西軽便鉄道路線計画図(『絵図・地図』121、国立公文書館所蔵)
 - 多摩川砂利・砂採掘関係書類(『近現代3』123、石井功家文書)

IV-6. 京王電気軌道の開通と郊外観光地の整備

- 大正2年に京王電気軌道が開通したことにより、多摩川が遊楽地となり、玉翠園でも鮎漁や臨川学校が行われ、行楽地化が進んだ
- 渋沢栄一などの実業家も巻き込みながら行われた玉川碑の再建について
 - 玉翠園と多摩川の鮎漁(絵はがき、井上昭一家文書)
 - 玉川碑と渋沢栄一の講演風景(石井義兼家文書)
 - 京王電車案内(『絵図・地図』123、石井三雄家旧蔵文書)

IV-7. 小田原急行鉄道の開通

- 小田急線の敷設計画による用地買収や、用地買収のルートの一部に狛江小学校の敷地が含まれる問題について

- 狛江駅設置のための地元での運動
- 小田急線の開業直後に計画された支線計画について
 - 敷地委員会開催通知(『近現代4』18、石井三雄家旧蔵文書)
 - 狛江停留場敷地買収につき寄付金入金依頼状(『近現代4』32、石井三雄家旧蔵文書)
 - ◎吉田初三郎の鳥瞰図(『絵図・地図』124、世田谷区立郷土資料館所蔵)
 - 木下氏撮影の狛江駅前(昭和10年頃)
 - ◎支線の計画(『絵図・地図』127)

IV-8. 太平洋戦争

- 村民の出征の様子や戦地と内地を結ぶ軍事郵便
- 戦時中における村の生活や戦争による被害
- 戦争により、もともと村内にあった企業が軍需産業に転換した事例や、新たに村内にできた企業について
- 戦没者慰霊と狛江市戦没者慰霊塔(西河原公園)
 - 出征兵士見送り写真(『通史編』775頁、栗山武雄氏提供 or 木下氏撮影『近現代4』巻カバー)
 - 軍事郵便
 - 昭和20年5月25日の空襲での被害状況図(『狛江・語りつぐ戦争体験』をもとに作成)
 - ◎狛江尋常高等小学校写真(昭和12年、木下氏撮影)
 - 警防団・防空演習・隣組から資料を選定するか
 - 軍需産業の分布図(『狛江・語りつぐ戦争体験』をもとに作成)
 - ◎戦没者慰霊塔(西河原公園)

IV-9. 近現代の道路整備

- 狛江村内における道路整備
 - 村内における主要道路の整備は、明治期から請願がなされているものの、実際の整備に着手したのは、大正後半～昭和前期にかけて
- 多摩水道橋の架橋
 - 多摩水道橋の架橋は、戦前から架橋運動が展開されていたが、戦争により中断を余儀なくされ、戦後再び架橋運動が行われたこともあり、昭和28年12月に完成した。
- 芝溝線(現世田谷通り)沿いの銀行町
 - 大正から昭和にかけて、狛江三叉路付近に相次いで商店が開業し、「銀行町」(狛江銀座)としてにぎわった
 - 近現代の村内を通る主要な道路の整備概略図(『通史編』619・621・843頁)
 - 多摩水道橋の写真
 - 昭和10年前後の銀行町(『思い出の銀行町』をもとに作成)

V-1. 村から町、そして市へ

- 戦後の人口動態から、狛江での人口が大きく増加
 - 昭和 27 年に町制施行、同 45 年に市制施行
 - まちの変化の様子を、航空写真を用いて紹介
- ※合併問題については、説明文で触れるにとどめる。

- 戦後の人口動態、世帯数の変遷
- 村・町・市の時代の航空写真
- ◎富永和作市長の市制宣言(『通史編』894 頁)

V-2. 人口の変遷と学校の増加

- 狛江の地図を掲げて、各小中学校の場所と開校年、学校の写真を示す
 - 住民の誘致運動もあり、昭和 48 年 4 月に都立狛江高等学校が開校した
- 小中学校の場所と開校年を示した地図
 - 周年誌等から、各学校の写真(小さくても良いので)

V-3. 都市化のなかで—宅地化の進展と災害対策

- 宅地化の進展による農地の縮小と農家の減少
 - 大規模団地の開発
 - 多摩ニュータウンの開発と小田急新線計画
 - 台風による大雨で町に大きな被害をもたらした野川と宅地化の進展の中で災害対策やインフラ整備を求める声
 - 野川緑地公園の整備と西野川せせらぎ(平成 2 年)、岩戸川せせらぎ(平成 4 年)
 - 開発が一定程度達成されると、自然保護を求める観点から、旧野川の復活を求める声(狛江駅北口問題を考える市民の会第 2 次報告書)
- ◎農地の縮小と農家の減少(『通史編』849 頁、高木光家旧蔵文書を改変)
 - 団地開発(多摩川住宅・都営狛江アパート・神代団地など)
 - ◎多摩ニュータウンの開発における小田急新線計画(『通史編』879 頁)
 - ◎御台橋付近の旧野川の写真(『小足立の民俗』15 頁)
 - 昭和 41 年 6 月の台風四号による野川の氾濫と改修

V-4. 都市化のなかで—公害問題と生活インフラの整備

- 人口の増加でゴミやし尿処理が問題となる
 - 下排水処理のための排水溝の整備を求める請願書・陳情書
 - 野川毒液流入事件やカドミ米の検出、六価クロムの検出など → 農地の減少に拍車をかける
- バキュームカーやゴミ処理の写真

◎旧六郷用水の埋め立て工事写真(『通史編』873 頁)

V-5. 都市化のなかで—社会教育施設の整備

- 青年団・青年学級・婦人学級の活動と狛江町集会所
- 各地域センター・狛江市民センターの建設
- 体育施設の整備
 - 青年団・青年学級・婦人学級の活動写真
 - 狛江町集会所の写真
 - 各地域センターの開館・狛江市民センターの写真
 - 市民グラウンド・狛江市民体育館・市民プール等運動施設

V-6. 地域のイベントと地域間交流

- 市民まつり
- いかだレース
- ふるさと友好都市（新潟県川口町）
 - ◎第1回市民まつりの写真(『通史編』927 頁、井上孝氏提供)
 - 近年の市民まつりのパンフレット(地域活性課寄贈文書)、市民まつりの広報
 - 第1回いかだレース参加者募集の広報
 - 第3回いかだレースの写真・パンフレット
 - ◎第5回いかだレースのパンフレット(←山梨県小菅村が初参加)(『通史編』929 頁)
 - ふるさと友好都市(新潟県川口町)
 - 中越地震での復旧支援写真(地域活性課寄贈文書箱4)
 - 『広報かわぐち』第 413 号(2008 年3月)(←感謝の碑贈呈の記事)

V-7. 多摩川水害

- 水害の発生と被害
- 多摩川決壊の碑の建設
 - 水害の写真
 - 水害関連の広報誌
 - 多摩川決壊の碑

V-8. 小田急線の高架化と狛江駅北口の再開発

- 小田急電鉄の高架複々線化事業
- 狛江駅北口再開発整備計画の立案と市民の反対
- 狛江駅北口問題を考える市民の会の発足と北口整備計画
- 狛江弁財天池特別緑地保全地区

- 高架化前の小田急線(駅前の混雑や踏切付近の写真)
- 高架複々線化後の小田急線
- ◎狛江駅北口問題を考える市民の会第一次報告書(A案・B案)(『近現代5』404)
- 再開発後の狛江駅北口
- 狛江弁財天池特別緑地保全地区

【掲載候補史料に関する凡例】

- ◎: 図版・写真あり
- : 未選定、要作製・撮影